古き暦の跡を訪ねて

本邦天文曆學史覺書 (1)

Notes on Our National Calendology.

渡邊敏夫 *Tosio Watanabe.*

過ぐる昭和十七年四月二十五日，行く春と共に，古き暦の跡を尋ねて，同好の士，井本，羽間の兩氏と丹生(ニフ)の鄉に遊んだ．これはその時に調べた私の暦に關する覺書の一節である．丹生と書いただけでは判らぬ人も多からう．ここは三重縣松阪市から西南三里程の山間に在る，多氣郡の一小村である．松阪にて松阪電軌鐵道に乘換へ，大師口下車，これより徒步にて清流に沿うて一里程行くと，丹生の村の入口に達する．地理不案內の我々は，省線相可(オウカ)口にて，紀伊南線に乘り換へ，相可にて下車，これよりバスを利用せんとしたのであつた．然し，驛員に尋ねると，乘り繼ぎ待ち合はせる間に，徒步にて相可迄行つた方が早いとのことで，さうすることにした．一點の雲も無い全くの快晴，田舍道を步むと，上着を脫いでもまだ汗ばむ程の暖かさである．途中，道を間違へたり，寄り路したりして，目的地についたのは三時近くでもあつたらうか．都會人が來ることは稀な片田舍ではあるが，人情純朴で，都會には見られぬ風景である．

丹生は，昔は人口も中々多く，殷盛であつた由である．この地より水銀を多く產出したため，丹生といふ地名を生じたとのことであるが，產出した水銀は遠く支那迄，遣唐使によつてもたらされたといふことである．現在では，採り盡して，少しも水銀は出ない．

この村には昔，賀茂杉大夫と名乘る曆師があつた．この曆師が頒行した曆が丹生曆といふものである．伊勢には，この近くの山田外宮の曆師から板行される曆があつて，この曆の方が全國によく知られ，"伊勢曆"と言へば，全く山田外宮の曆師が板行した曆と考へる人が多い．實際，江戶時代には，伊勢曆と云へば，さう考へられて居たのであるから，現今に於て丹生曆を知る人が皆無であるのも尤もなことである．夫れ程，丹生曆の存在は微かではあつたが，その歷史は遙かに古く，本來の伊勢曆はこの丹生曆であつたのである．私は兼ねてから，所謂伊勢曆なるものの起原を明かにしておきたいと考へて居たので，一度機會があれば丹生を訪ねて見やうとして居たのであつた．時に同好の士を得て，年來の望みを達するを得たのであるが，來て見れば此處も既に昔日の俤は無く，曆師なる賀茂家は今より二十年前東京に移轉されたとの事で，殘るものとしては屋敷跡と，丹生國民學校に保存された一枚の曆の板木だけであつた．

而して，村人に尋ねても，賀茂家について知つて居る人は殆んど無いといふ狀態で，いささか失望した次第であつた．

賀茂家の祖先は賀茂保憲の子，保基なる人が，天德二戊午年（曆暦958年）に伊勢の國の暦師と定められて以來，世々陰陽師を家職とし暦を頒行したものであつた．保憲は陰陽家として名高い人であり，この子光榮に暦道を，弟子の安倍晴明には天文道を傳へた史實はよく知られたことである．然し何時頃から丹生暦なるものが，作られ出したかは判然としないが，少くとも戰國時代頃からであることには間違が無いやうである．戰間時代，戰亂のため，京暦が地方に行き渡らなくなつて，地方の人々は神宮御師に賴んで買つて來て貰つたものがいつとなしに御師の壇家への土產として配られるやうになつて起つたものが伊勢暦であると，平田篤胤の俗神道大意に記されて居る．これがため伊勢暦の起原は戰國時代と言はれて居るやうである．然しここに言ふ伊勢暦なるものは，世に謂ふ山田外宮の暦師の板行にかゝる伊勢暦ではなくて，實に丹生暦のことである．山田外宮の暦が板行されるやうになつたのは，私が調査した現在の史料からは寬永年間のことである．從つて，江戶時代，全國で多くの暦が出版された中では，丹生暦はその起原が古いものである．丹生暦は發行部數が僅小なるためと，その頒暦地域が一地方に限られて居たため，宇治山田から出る暦に押されて，その存在は餘り知られなかつたものと考へられる．

昭和十七年十月上京の折，私は賀茂家の子孫の方を尋ねて，同家に傳はる右記錄を見せて戴いた，六通の古記錄が存在するのみであつた．何れも元龜天正頃のものである．その外若干，暦の板木をもつて作られた火鉢があつた．何れの暦師でも同じであつたであらうが，明治維新後，傳來の家業を廢止するや，板木は薪として燃料に使はれてしまつたもので，板木の現存するものは殆んど無いと云つてよい．誠に惜しいことをしたものである．板木でなくとも，丹生暦は，その數も少く，暦そのものの現存するものも稀である．

丹生の鄕に入ると，直ぐ道路の右側に，二十間四方位の空地に，畠が作られて居るのが，賀茂家の屋敷跡である．周圍の土塀も北側だけが殘されて居り，屋敷內には井戶がある．その昔には，露臺を築いて，天文觀測もしたといふことであるが，その跡は別に殘つては居らない．

菩提寺にでも行つて尋ねたならば，何か手懸りがありはしないだらうかとも考へたが，代々神葬であつたため菩提寺は無い由である．然し，村の入口の共同墓地には，比較的新しい墓碑が殘つて居る．村の伊藤善三郎氏が賀茂家の墓守をして居られる由にて，ここを訪ねて，墓に案內を請ふた．田舍にしては，生垣を以て周圍をめぐらし，こじんまりと淸掃された墓地である．賀茂家の奧津城はこの共同墓地の中程より兩側に，北面して，前後二列に並んで居る．そ

の中，暦師として關係ある墓碑だけをここに書き記しておこう．

從五位上賀茂保親墳	文久三年癸亥十月三日 三十三世左馬助五十九歳
從五位上賀茂保健墳	三十四世俗稱賀茂杉大夫壽五十六歳 天保八丁酉正月廿九日誕生 明治廿五年四月廿一日神避

賀茂保建の碑には

おしと思ふ花はしまふて夏小立

といふ辭世の句が彫られて居る．

墓碑から見ても，賀茂家は，現在の戸主迄，三十五世となり，非常に古い家柄である．土御門家の記錄によると，賀茂家には一代男子なく，賀茂在方の末子を自分の娘と嫁して，相續させたやうに記されて居る．これは寶暦三（學1753）年の記錄であるから，其の後のことは分らないが，恐らく，血統は續いて今日に至つて居るであらう．墓碑にもある通り，從五位上の位階をもつて居るのであるから，暦師としては過分の待遇であつて，相當の家柄であつたことを物語つて居る．その祖賀茂保基なる人は，賀茂保憲の末子と記されて居ることは既に書いたが，或る本によると，賀茂保憲の子には保基なる人は無いといふことである．この點については，私はまだ調べて居らない．何れにしても，何かの由緒あることには間違ひ無からう．

陰陽師，暦師である賀茂家は代々俗稱を“杉大夫”と名乘つた．現在の戸主賀茂英夫氏も杉大夫を名乘つて居られる．丹生暦は，その初めは，伊勢一國の國暦であつたが，紀州迄も手廣く賣暦したものであつた．記錄によれば，毎年四五千部づゝ印刷したもののやうである．他所の暦師が板行する暦本數に比すれば，ごく僅少であつたであらう．丹生には，なほ賀茂杉大夫組下陰陽師として野呂惣大夫，旭善大夫，旭源大夫，古儀市大夫なる人が住んで居た．伊勢山田の暦師に野呂吉大夫といふ人があつたが，これは丹生の野呂の一統であはなかつたらうか．又，現在でも古儀なる姓の人が丹生村に，しかも賀茂家の直ぐ南隣りにあるが，これが市大夫の後であらう．之等の陰陽師は，暦本を頒行した形跡はない．

陽も已に西に傾き，墓地に佇む我等の影も長い．折角遠路を來られたことでもあるから，一夜を自分の家にでも泊つて，ゆつくりと調べて行つてはどうかとすゝめる伊藤氏の好意を辭して，丹生の鄉を後に，歸途に著いた．

この調査に當り，丹生村役場の方々，及び丹生國民學校教頭辻友三氏には，休日にもかゝはらず，私達のために出て來られて，お世話を願つた．殊に，辻氏は丹生鄉土史の研究家であり，有益なる話を承り，厚く感謝の意を表するものである

なほ丹生暦や伊勢暦の詳細に關しては，他日，稿を新たにして發表したいと思つて居る．今なほ私の疑問として殘つて居ることは，何故賀茂家がこの僻地に居を構へて暦を出したかといふことである．この點が明になれば，暦に關連した他の方面の事も，幾分もつと判明するであらうと私は考へて居る．

小遊星課を創設する

Inauguration of "Asteroid" Section

本會觀測部

近頃の本會"急報"を見る人々は，小遊星の豫報位置が屢々掲げられ，其の觀測が要求されてゐるのを知つて居られるだらう．廣瀨秀雄氏から希望あり，又，其の他にも此の問題の研究をすゝめられる人々が多い．これにより，本會觀測部では，彗星課の一部から"小遊星課"を獨立させることにし，直ちに其の活動を開始する．事務は當分の間，田上天文臺で執る．參加希望者は，所持の望遠鏡の大きさを附記して，申し入れて頂きたい．

小遊星をアマチュアたちが觀測するについては，光度の變動と，經緯度の概略を觀測することと，先づ此の二方面がある．そのうち，取り敢へず，こゝでは位置（經緯度）の概略觀測を指導する．これにも亦三つの方法がある．(1) 星野の寫眞を撮ることと，(2) 輪形測微尺で觀測することと，(3) 星野の見取り圖（スケッチ）を取ることである．このうち，寫眞にはカメラと赤道儀と特殊な熟練が必要であり，輪形測微尺觀測には良い時計が必要であつて，今までにも屢々この方法や，注意事項は書いた．小遊星の附近の星野の見取り圖を作ることは，今まで殆んど書いたことが無かつたが，これは比較的容易で，只，必要なものは口徑7センチ以上の簡單な望遠鏡のみである．見取り圖から小遊星の經緯度（赤經と赤緯）を算定するには，少なくともボン星圖やバイエル・グラフ星圖が必要であるが，若し此の星圖を所持してゐなければ，田上天文臺へ其の見取り圖を送つて下されば算定してあげる．何れ，實地の觀測法や研究法は，今後天界や急報に書くつもりであるし，又，位置豫報の計算についても，追つて掲載したいと思ふ．とにかく，國内も，國外も，天文觀測者が減少しつゝある時，熱心なアマチュア諸氏によつて小遊星を確實に捕捉することは，世界の天文學への貢獻として重要視すべきものである．(1943—8—1)